

# 「分かる！出来る！」授業の実践と 学習法の指導で、学力と共に主体性を育む

東京大大学院教育学研究科教授 市川伸一

どのような授業や支援により、子どもが自ら学びに向かおうとする気持ちが育まれるのか。東京大大学院教育学研究科の市川伸一教授が、認知心理学や教育心理学の見地から、学びへの意欲が育つ学習モデルと、具体的な授業のポイントを提示する。

## ●「主体的に学ぶ」とは

### 外発的な動機をきっかけに 内発的な動機に結び付ける

昔に比べて子どもの主体性が落ちてきているのは、一概にいえないと思います。「言われたことはやるけれど、自分から進んでやろうとしない」ことは、以前からいわれてきました。ただ、少なくとも学習に限った場合、あまり熱心に取り組まなくなったといえるかもしれません。その背景には、豊かな社会になり、高学歴を得なくてもある程度の暮らしが出来るようになった結果、保護者や先生からの「勉強しなさい」というプレッシャーが少なくなるなど、外発的な動機の低下が考えら

れます。また、「楽しいから学ぶ」というような内発的な動機も、ゲームやマンガなどの楽しいことが増え、学習が相対的に面白くなくなっていくことで低下しているように見えます。

「主体的に学ぶ」とは、学びに面白さや意義を感じ、自ら取り組むことです。面白くて学習している子どもは、内発的な動機から学んでいるといえます。一方、必ずしも面白くなくても、「自分にとって必要だからやろう」と、意義を感じて学ぶ子どももいます。これは、内発的な動機と外発的な動機の間で位置しますが、自己決定しているという点では主体的に学んでいるといえるでしょう。しかし、最初から全ての教科に対して面白

さや意義を感じさせようとするのは、少々無理があります。そこで、きっかけとして、外発的な動機を用意すると良いと思います。

子どもの頃は、「友だちと一緒に学びたい」「先生が好きだから勉強する」など、人間関係に引き込まれて学習に向かうことがよくあります。これは学習に対する本質的な欲求ではありませんが、人間関係から入って学習しているうちに、学習の面白さや意義に気付くように促すことが出来ます。そのためには、授業で、「分かる！出来る！」という楽しさを味わわせたり、どれくらい力が付いたかを実感するような指導をしたり、学んだことが生活や社会でどう役立つかを伝えたりする必要ががあります。そうした指導によって、社

## 主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める



いちかわ・しんいち◎東京大文学部卒業。文学博士。専門は認知心理学、教育心理学。学習指導に認知心理学の成果を応用する研究として、小中学生向けの学習相談などにも取り組む。主な著書に、『勉強法の科学』（岩波書店）、『学ぶ意欲とスキルを育てる』（小学館）など。

会に出た時、学校の先生がいなくても、学習そのものに面白さや意義を見いだし、自ら学んで成長できるようにするでしょう。

また、小学校の学習は、抽象的な内容が増える中学校以降に比べると、「勉強しておかないと、大人になったら困るよ」と言えるような、何に役立つかがイメージしやすいものが多いので、そうした点を意識して伝えて、学習の意義に気付かせることが出来ます。ただ、中には「算数は問題を解けると気持ちいいから好き」と、意義に関係なく学ぶ子どももいるので、「あまり狭く実用的な意義ばかりを伝えると、「それは自分には関係ない」と、早々に見切りを付けられてしまう場合もあります。学習の面白さや意義は、広く捉えるこ

とが大切でしょう。

### ●主体性を育む授業とは

#### 主体性の育成につながる 習得と探究の学習モデル

主体性を引き出すための授業として、私は習得と探究の学習モデルを提唱しています（P. 22図）。まず、習得サイクルの授業は、4ステップからなります。

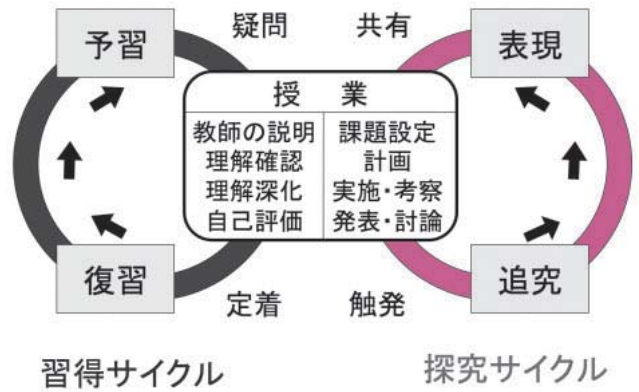
「教師の説明」では、教師がその授業で理解させたい内容を教えます。ポイントは、低学力の子どもでも理解できるように、丁寧に分かりやすく説明することです。「分かる」と実感させて、最後まで授業に参加する意欲を持続させるためです。

「理解確認」では、教えたことを理解しているのかを、ペアやグループで説明し合ったり、類題を解いたりさせて確認します。友だち同士で確認することで、高学力の子どもは教えることを通して更に説明力が付きますし、低学力の子どもは理解が深まります。挙手をして「ここが分かりません」と教師に聞けない子どもでも、友だちになら気軽に質問できるでしょう。

「理解深化」では、教師がその日の目標に合わせて用意した課題に取り組んで理解を深めます。学級全員が解いてみたいと思える面白みがあり、かつ一生懸命に考えれば出来るような課題が理想です。そうした課題を設定するのは容易ではありませんが、学力が高い子どもでも十分に考える必要があるレベルに設定し、分からない子どもには協同解決を促すとよいと思います。教科書の発展問題でもよいですが、学級の理解度や興味に合わせて工夫すると、子どもの意欲がより高まるでしょう。そうした工夫は、普段から教師自身が「ここまで理解させたい」と考える習慣を付けると共に、研究授業などでも「自分だったらこういう課題の出し方をする」といった視点から協議をするとうよいと思います。

「自己評価」では、子どもが授業を振り返り、分かったことや分からなかったことを考えます。「力が付いた」と自覚することで自信を深め、学習に前向きな気持ちが生まれます。

図 習得と探究の学習モデル



\*市川教授の資料をそのまま掲載

**習得した内容が役立つことを  
探究を通して実感させる**

このように、最初に丁寧に教えて、基礎から順を追って理解を深めていく習得サイクルの授業を、私は「教えて考えさせる授業」と呼んでいます。一方、探究サイクルの授業は、基本的に「考えさせながら教える授業」といえるでしょう。この授業では、子どもが自分で設定や選択をした課題に取り組み、先生は子どもが困っている場合などに支援します。

探究サイクルの授業を充実させるためには、十分な習得によって基礎がしっかり身に付いていなければなりません。スポーツで基

礎技術の土台がなければ、試合を楽しめないのと同じことです。最初に自分で課題を見付ける段階でも、そもそも基礎がなければ、自分がやりたいことが分かりません。

ただ、必ずしも習得の後に探究という順序でなくても構いません。最初に「探究」の授業をし、自分に足りない点を自覚させてから「習得」の授業に移ることで、意欲的に取り組める場合もあります。習得してから探究するのは「基礎から積み上げる学び」であり、探究してから習得するのは「基礎に下りていく学び」です。私はどちらの方向があってもよいと思いますが、習得と探究のどちらのサイクルが適しているのかを見極め、めりはりをつけることが大切だと思います。教科学習では、習得8割、探究2割ほどをイメージしていますが、「総合的な学習の時間」は全てが探究の授業になると考えています。

単元の最後などに、習得した内容を用いて探究をするという流れが理想です。一生懸命に学習した内容が、探究の授業を通して「こんなふう役に立つのか」と実感することで、「学校で学ぶことは役に立つ」という気持ちにつながります。

● **主体性を育む指導の工夫**

**自分を見つめる力が付く**

**高学年から学び方の転換を**

高学年頃から学び方を徐々に変化させる必

要があることも重要なポイントです。

5年生くらいになると、分かっていることと分かっていることを自覚するようになり、「自分の学習法は合っているのか」と自問する子どもが増えます。また、授業では難しい内容が増え、それまでの反復中心の学習では次第についていけなくなります。ですから、高学年から、反復による暗記から、意味や構造を考える学習法へと切り換える必要があります。例えば、漢字であれば、それまでの反復中心の学習から、部首の意味を理解して構造的に学べるように指導するのです。

これまで、学習法は個々の子どもに委ねられることが多かったと思いますが、それが学力差が広がる一因になっていたのではないのでしょうか。例えば、「学習法講座」のような形で、先生が学習法を教えるのとよいと思います。学び方や考え方のちょっとした工夫で、理解が深まることはよくあります。例えば、「 $10100 \div 2$ 」の問題では、多くの子どもが筆算を始めます。「大きな数は筆算」という固定観念があるからです。しかし、「1万円と1000円を2人で分けると考えてもらえん」と言うと、「5000円と500円を足して5050円だ。これなら出来る」と暗算で解けることに気がきます。他にも、上手な暗記の仕方など、工夫できる学び方はいろいろあります。これくらいの工夫は自分でするものと考えられますが、なかなか気付けない



## 主体的に学ぶ力を育む——学び方の工夫で学習意欲を高める

子どもも多いので教えるとういと思えます。

### 効果的な学習法を指導して「報われる努力」へと導く

主体性と学力は、必ずしも一致しないことがあります。例えば、学力は高いのに主体性が見られない子どもは少なくありません。「言われたことはきちんとかやるのに……」というタイプです。こういう子どもは、小学校ではそれなりの成績が取れても、中学校以降で伸び悩む可能性があります。自分で計画を立てさせたり、自己診断をさせて弱点を克服できるようにしたりして、学習の必要性を自分のこととして実感させるとよいでしょう。

一方、自ら頑張って学習しているのに、学力に結び付かない子どももいます。興味のあつる内容以外の学習には見向きもしないため、全体として成績が良くないタイプです。また、反復練習だけに取り組み、意味理解の学習が抜け落ちていくタイプもよく見られます。本人は学習した気になり、実際に努力もしますが、こうした学習法では思考力や表現力が求められる問題に太刀打ちできません。努力が報われるように、学習法を教えて正しい方向に導いてあげることが、先生の大切な役割です。

主体性がより求められるのが、家庭学習です。現状を見ると予習があまり重視されていませんが、これは非常にもったいないと考え

ています。大人も同じですが、難しい内容は1回教えられただけでは理解できません。あらかじめ教科書を読み、何を学ぶのかを知り、分からなかったことを意識して授業に臨むことで深い理解につながります。予習は、分からなかったことに付箋を貼るだけで十分で、1教科につき数分で済みますから、家庭学習に加えていただくとういと思えます。

最初から家庭で予習をさせるのは難しいかもしれませんが、授業の冒頭の5分を「予習タイム」にして、慣れてきたら宿題にするというのもよいでしょう。3、4年生から予習のトレーニングを始め、高学年で習慣化させるのが理想です。

### ● これからの時代に大切な主体性

#### 学校の先生がいなくても 学び続けられる力を付ける

激しく変化する社会では、ますます主体性が求められるようになります。知識基盤社会といわれる社会を生きていくためには、大学までに得た知識では追い付かなくなり、いろいろなことを自分から学び続けなくてはなりません。ICTを上手に活用して自分をパワーアップさせる術を身に付けたり、グローバル社会において多様な文化や知識に触れ、その中で自分の考えをしっかりと持てる力も大切になります。

私は、主体性に支えられた育ちに関して、

次のようなイメージを持っています。小学校低学年は、教科学習の多くが授業で完結する状態です。それが中学年以降、授業を超えた子ども自身の学びの割合が次第に大きくなっていきます。中学校、高校、大学と進むにつれて子ども自身の学びはますます大きくなり、やがて社会に出ると授業はなくなります。その頃には、先生の代わりに、本やインターネットから情報を得たり、人とかわつたりしながら学び、自分を成長させる力が身に付いているのです。そのように、主体性を育むことは、子どもが自立して未来を生き抜く力につながると意識し、指導を工夫されとういと思えます。

## 特集取材を終えて

「言われたことはやるけれど、それ以上のことはやらない」これまでの取材で先生に子どもの様子を伺うと、多くの学校から挙げられる課題でした。その原因に「保護者の関与」が強まっていると感じている先生も少なくありませんでした。しかし、今回の取材を通じて、子どもの主体性が落ちているというよりも、これからの時代に求められる力として主体性が相対的に大きくなっているのだと感じました。そして、点数に表れる学力には直結しなくても、見通しを与えたり、学び方を工夫したりして、子どもが自ら「もっと知りたい、学びたい」と思えるような環境を整えることによって、主体的に学ぶ力が育まれていくように思いました。

VIEW21 小学版編集長 杉田美穂